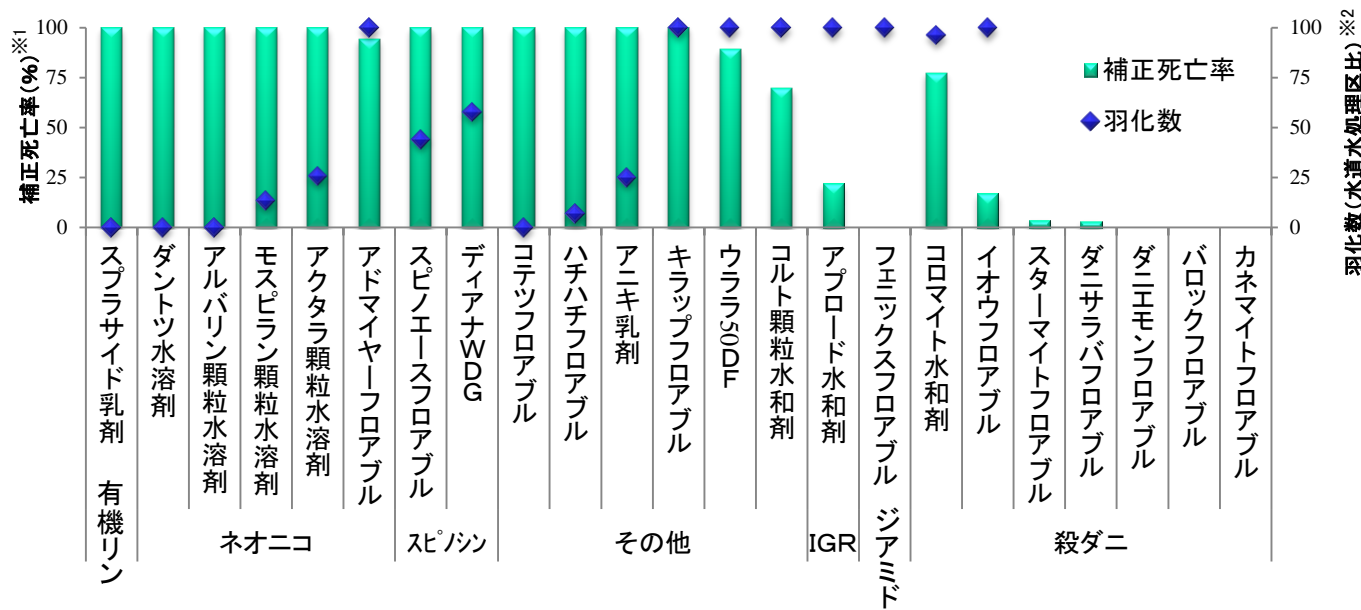


# ヤノネカイガラムシ寄生蜂に対する薬剤の影響

導入天敵のヤノネキイロコバチの寄生率は、無防除・有機栽培園に比べ慣行防除園で低い傾向にあり、薬剤の影響が大きいと考えられた。一方、近年上市された薬剤の中には天敵への影響が小さい種類もあることから、本種に対する各種薬剤の影響を評価した。



ヤノネキイロコバチ幼虫



ヤノネキイロコバチ蛹

図 ヤノネキイロコバチ成虫と羽化に対する薬剤の影響

各供試薬剤の濃度はカンキツの登録濃度で、登録濃度に幅がある場合は濃い濃度で実施

※1補正死亡率：ドライフィルム法によるヤノネキイロコバチ成虫の薬剤処理24時間後の生存率を以下の計算式に代入し求めた。

補正死亡率 = (水道水処理区の生存率 - 処理区の生存率) / 水道水処理区の生存率

※2羽化数(水道水処理区比)：ヤノネカイガラムシ雌成虫寄生枝を薬剤浸漬し、処理9日後に羽化してきたヤノネキイロコバチ成虫を計数。水道水処理区のヤノネカイガラムシ100頭あたり羽化数(3.8頭)を100として、その比により求めた。100を超えた場合も100と図示した。殺ダニ剤はコロマイト水和剤・イオウフロアブルのみ供試した。

有機リン剤、ネオニコ剤の多くの種類、コテツフロアブル、ハチハチフロアブルの影響が大きく、アプロード水和剤、コルト顆粒水和剤、フェニックスフロアブル、殺ダニ剤の影響は小さかった。アドマイヤーフロアブル、キラップフロアブル、ウララ50DFは成虫に対する影響はあるものの、羽化に対する影響は小さかった。

現在カンキツ園で使用されている多くの薬剤は、ヤノネキイロコバチに対して悪影響が大きかったが、近年上市された薬剤の中には影響の小さい種類もあり、これらの剤を選択利用すれば寄生蜂の寄生率が向上し、ヤノネカイガラムシに対する密度抑制効果が得られやすくなると考えられた。